

# ざんげ

鈴木三重吉

青空文庫



ロシアのウラディミールといふ町に、イワン・アシオノフといふ商人がゐりました。住居すまひと、店を二つももつてゐるほどのはたらしき人で、謡うたをうたふことの大好きな、おどけ上手の、正直ものでした。

そのイワンが或夏ある、ニズニイといふ町の市へ品物をさばきに出かけました。イワンが馬車をやとつて荷物をつみ入れさせ、子どもたちや、おかみさんに、いつてくるよとあいさつをしますと、おかみさんは心配さうな顔をして、

「今日立つのはおよしになつたらどうでせう。私わたしはいやな夢を見  
たんですが。」と言ひました。

「ふゝん、もうけた金を使つてでも来るかと気になるのかな。」  
とイワンは笑ひました。

「そんなことならいゝんですけれど、私わたしはそれはへんな夢を見  
んです。あなたがニズニイからかへつていらしつて、帽子をおぬ  
ぎになると、おつむりの髪がすっかり白髪になつてる夢を見た  
んです。」

「はゝゝそれはけつこうな前兆だよ。まあゝ見てお出いで。品物  
をすっかり売り上げて、土産を買つて来るから。」

イワンはかう言ひゝ馬車を走らせて出ていきました。そして

ニズニイまでの道のりの半分まで来ますと、リアザンの町から来た、或知<sup>しりあひ</sup>合の商人に出あひました。その晩二人は、或村の宿屋について、一しよにお茶を飲んだりしたのち、となり合つた部屋にはいつてやすみました。

イワンはいつも夜は早く寝るのが習慣でした。それである朝も、涼しい間に歩かうと思つて、まだ夜のあけないうちに馬車つかひをおこして、馬を引き出させました。宿屋の亭<sup>ていしゆ</sup>主たちは裏手の小さな建物に寝てゐました。イワンはその亭主をおこしてお金をはらつて立ちました。

そこから二十五マイルばかり来ますと、イワンは道ばたの宿屋へ馬車をとめて、馬にかひばをつけさせました。イワンはお茶の

用意をたのんで、それが出来るまで戸口にすわつて、ギターをとり出してならしてゐました。すると、そこへ、三頭だての馬車が、リン／＼と鈴を鳴らしながらとぶやうにかけて来て、ぴたりとイワンの目の前にとまりました。すると中から一人の巡査が兵たいを二人つれて下りて来て、いきなりイワンに向つて、おまいの名前は何といふか、どこから来たかと聞きます。イワンは、これ／＼かう／＼ですと答へて、

「今お茶が来ます。一しよにお飲み下さい。」と言ひますと、巡査は、そんなことには耳をもかさなで、おまいはゆうべどこへ泊つた、一人で泊つたか、それとも、だれかつれのものと一しよだつたか、今朝そのつれのものゝ顔を見たか、一たいどうして夜

のあけないうちに立つて来たのだと、うるさく聞きしらべます。

イワンは、何だつてそんなことを一々聞きほじるのだらうと、ふしんに思ひながら、すべてをありのまゝに話しました。

「何だか私わたしが盗どろぼう坊かおひはぎでもしたやうですね。私はじぶんの商用で出かけて来てゐるのです。そんなにくどくどおしらべになる必要はありません。」と、イワンはぷり／＼してかう言ひました。

「ちよつとおまいの荷物を検査する。おい君たち、こつちへ来て下さい。」と、巡査は二人の兵たいをよんで、イワンの荷物をとつきはじめました。巡査は、イワンの持ものを一々さがしてゐるうちふと、手さげ袋の中からナイフをとり出して、

「おい、このナイフはだれのものだ。」と、イワンに向つてどなりました。イワンは首をかしげながらそれを見ますと、刃にべつとり血がついてゐます。

「どうしてこのナイフに血がついてゐるのだ。」と巡査はたゞみかけてどなりました。イワンはびつくりしたあまり、返答をしようと思つても急には言葉が出ず、

「し、しりません。」と、どもりながら答へました。

「今朝見ると、おまいのつれの商人はのどを切られて死んでゐた。おまいがその犯人だらう。あの建物は中から錠がかゝつてゐた。

そして、おまいと二人きりしかるなかつたのぢやないか。そのあげくにおまいの袋の中から血のついたこのナイフが出た。おまい

のその顔、そのきよ動だけ見ても事實はたしかだ。言へ。どういふふうにして殺したのか、いくら金を盗みとつたか、きつぱりと言へ。」

イワンは、それは私わたしのしたことではありません、私はゆうべしよに茶を飲んでからあとは、ずっとあの人の顔を見なかつたのです、私はじぶんのお金を八千ルーブルもつてゐる以外に、人の金などはもつてゐません、と、ちかつてかう言ひました。しかしイワンのその声はきれ／＼でした。恐怖のために顔はまつ青さをになつて、まるでその罪人かなぞのやうに、からだ中をがた／＼ふるはせてゐました。

巡査は兵たいに言ひつけて、イワンへ綱をかけさせました。イ

ワンは両足をしばりつけられて、巡査の馬車の中になげこまれると、手で十字を切つて、泣き出しました。

イワンは所持金と馬車につんでゐた商品をことごとく没収された上、そこから一ばん近くの町へはこぼれて、牢屋らうやへおしこめられてしまひました。

警察官はウラデイミイルの町へ出かけて、イワンの人柄や、ふだんのおこなひなぞをとりしらべました。町の人たちは、イワンは、ずっと前にはよく酒も飲み、なまけもしてゐたが、近来はあまり酒も飲まない、根が正直ないゝ人間だと弁護しました。しかし裁判の結果、イワンは、あの、リアザンの商人を殺して二万ルーブルの金をとつた、実さいの犯人ときめられてしまひました。

## 二

イワンのおかみさんは、その宣告を聞いてびつくりしました。子ども二人はみんなまだ小さく、下の子などはお乳をはなれないくらゐです。おかみさんは、その二人の子どもをつれて、イワンが入れられてゐる牢屋らうやへたづねていきました。はじめはどうしても面会を許されませんでした。さんざんにねだりたのんで、ようやく聞きとゞけてもらひ、役人につれられて、イワンのそばへいきました。

いつて見ると、イワンは囚人の服をきせられ、くさりでしばら

れて、盗人たちや、いろんな罪人たちと一しよに投げこまれてゐます。おかみさんは、イワンのそのありさまを見ると、その場へたふれて、目をまはしてしまひました。おかみさんは、人々にかいほうされて、やうやく正気にかへりました。そして、泣きく子どもを引きよせて、一しよにイワンのそばへすわりました。そして家のことうちや、店のことなどを話したのち、イワンが町を出てからのことをくはしく聞きたゞしました。

「おや、まあ、さういふわけなのですか。……一たいどうしたらあなたのあかりが立つのでせう。」とおかみさんは涙をふきく言ひました。

「かうなれば、最後に皇帝へ書面を出して、罪のないものに罰を

加へて下さらないやうにおねがひするまでだ。」とイワンが答へました。

「私<sup>わたし</sup>はすぐに皇帝へ願書を出したのですが、つかへされてしまひました。」とおかみさんが言ひました。イワンはそれを聞くと、もう何を言ふ力もないやうに、だまつてうつぶしてしまひました。

「だから一ばんはじめ私<sup>わたし</sup>がおとめしたでせう？ あんなへんな夢を見たから、あの日は立つのをおよしなさいと言つたんですのね、あなた、私にだけはほんとうのことを言つて下さい。あなたはじつさい何もしたんじゃないのですか。」と泣き／＼問ひつめました。イワンは、両手を顔におしあて、ぼろ／＼涙を流しながら、

「あゝ、おまへまでも私わしをうたぐるのかい。」と言ひました。

さうしてるところへ一人の兵たいが来て、おかみさんや子どもたちに立てと命じました。イワンは家族たちに、最後の「さやうなら」を言ひました。

イワンは一人になると、今のさつき、おかみさんの言つたことを一々考へかへして見ました。

「あの女までが私わしをうたがはうとしてゐる。ほんとうのことは神さまが見てゐて下さるばかりだ。おすがりするのは神さまより外にはない。私わしはもう神さまのお慈愛をまつだけだ。」

イワンはかう決心して、この上皇帝へ嘆願書を出すのも思ひひまり、すべての望みもなげうつてしまひました。そしてたゞ神さ

まへお祈りを上げました。

イワンは答<sup>たいけい</sup>刑を加へられた上、流罪にされることになりました。それでまづむちでもつて半<sup>はんじに</sup>死になるまでぶたれました。そしてその傷がなほるとすぐに、他の懲役人たちと一しよに、とほくシベリヤへおくられました。

イワンはそこで二十六年の間服役しました。今はイワンの髪の毛も、すっかりまつ白になり、ひげも長くのびて、まばらに、そして灰色になつてしまひました。腰もこぐんで、歩くのも、のそり／＼としか歩けなくなりました。心もすっかりしをれつくして口をきくこともまれですし、笑ふことなぞは一どだつてありません。たゞ、とき／＼だまつてお祈りを上げてゐるだけです。

イワンは、こゝへ来てから、靴をこしらへることを習ひました。そしてその仕事でわづかばかりのお金をもらふと、それでもつて「聖書」を買ひました。そして二十六年の間、毎日仕事がをはつてから日がくれるまでの間の、わづかなあかるみでもつて、一生けんめいにそれをよみつゞけました。それから日曜ごとには、獄中の教会堂へ行つて、きたうしよ祈禱書をよみ、合唱に加はつて讚美歌をうたひました。すつかり年をとつても、むかし謡をうたひなれてゐたので、声だけはきれいでした。

監獄の役人たちは、温順なイワンをあはれがつてゐました。一しよにはいつてゐる囚人の全部はイワンを尊敬して、みんなで「おぢいさま」とよび「聖徒」とよんでゐました。みんなは役人

にたいして何か願ひ出たいことがあると、きまつてイワンから言つてもらひ、おたがひの間にあらそひがおきると、すぐにイワンのところへ来て、とりさばいてもらひました。

イワンの家からは二十六年の間、何のたよりも来ません。イワンにはじぶんの家内や子どもたちの生死さへもわかりませんでした。

## 三

ところが、或日、<sup>ある</sup>また一団の囚人がロシアからおくられて来ま

した。夕方になりますと、ふるい囚人たちは、それらの新来のものたちのぐるりにあつまつて、一々、おまいはどここの町、どこの村のものか、どうして処刑をうけたのかと聞きました。イワンもそれらの人々のそばにすわつて、くびをうなだれたまゝ、話を聞いてゐました。

新来の一人に、六十になるといふ、白ひげをみじかくかつた、背のたかい、がんぢような年よりがゐりました。そのぢいさんが、みんなに向つて、じぶんが収監されたいきさつを話し出しました。「実にばかげきつた話だよ。」とぢいさんは言ひ出しました。

「おれは、そりについてゐた馬を一匹きはづして来たんだ。すると、たちまちつかまつて、窃盗罪に問はれたわけだ。おれは言つ

たよ。何もぬすんだわけぢやない、早くうちへかへらうと思つて借りたんだ。そのしようこには、家へ来ると、ちやんと馬をにがしてやつてるぢやないか。しかもその馬の御者つてのは、おれのともしだちだよ。だから、何もかまやしないぢやないかと言つたんだ。だけど、やつらは、いけない、盗んだんだつて言やあがるんさ。ぢや、いつどこで、どんなふうにして盗んだかい、とつツこむと、それにはまるで返答が出来ないんだ。まつたくおれは、何のわるいこともしないのに、こんなところへ送りつけられたんだ。いや、じつをいへば、そのまへには一ど、ほんとうに悪いことをしたことがある。そいつをおさへられたら、りつぱにこゝへおくられても苦情は言へないんだが、めうなもので、そのときには、

とう／＼つかまらないですんだんだ。といふと、こゝへはじめて来たやうだが、何、前にも一ど来たことがあるよ。そのときには、永くゐないでかへれたのさ。」

「おまいはどこから来たんだい？」と或<sup>ある</sup>一人が聞きました。

「おれかい？ おれはウラデイミイルのものだ。おれんとこのかゝあも、やはりあの町の生れだ。おれはマカールといふ名まへなんだが、世間ぢやセミヨニツチとも言つてゐた。」と、ぢいさんは答へました。

イワンはウラデイミイルと聞くと、うなだれてゐた頭を上げて、「ではおまいさんは、あの町のイワンといふ商人のことをしつてゐますか。あの一家のものはまだ生きてゐますかしら。」と、そ

れとなく、じぶんの家内や子どもの安否を聞きさぐらうとしました。

「あゝ、イワンの家か。しつてるとも。あの家は金もちだ。もつとも、お父つあんは、シベリヤへ来るとかいふがね。やつぱり、おれたち見たいな罪人らしい。ときにおまいはもういゝ年のやうだが、一たい何をしてこんなところへ送られたんだ。」

しかしイワンは、じぶんのいたましい不幸をうちあけて話す元気もありませんでした。イワンは聞かれてもたゞため息をして、「わしは悪いことをしたので、もう二十六年もこゝにかうしてゐるのだよ。」と答へました。

「悪いことつて何をしたんだい。」とマカールは、かさねて聞き

ました。

「いや、かういふ目に合ふのがほんとうだらうよ。」とイワンは言ひました。すると、仲間の一人がイワンに代つて話しました。

だれか悪いやつがゐて、或商人を殺して、血のついたナイフをこの人の荷物の中へ入れこんだのだ、そのために、罪もないこの人が犯人にされてしまつたのだと言ひますと、マカールは、

「はゝアん。」と、びつくりしたやうにイワンの顔を見つめながら、ぽんとひぎをたゝいて、

「へゝえ、さうかなア。ふうん。めうなこともあるものだね。だがおまいもひどくおぢいさんになつたな。」と、マカールは一人でかう言ひました。

はたのものたちが、マカールにどうしてそんなにびつくりしたやうに言ふのかと聞きますと、マカールは何にも答へずに、

「や、ともかく、この人にあふつていふのがふしぎなのさ。」と言ひました。

イワンは、それではこのぢいさんは、あの商人を殺した犯人をしつてゐるのかもしれないと思ひながら、

「ぢやアおまいさんはあの殺人事件のことをしつてゐるんだね。それとも、まへにどこかでわしを見かけたことでもあるのかい。」と聞きました。

「はッは、あの事件をしらないでどうするんだ。世間中のうはさ<sup>のほ</sup>に上つた犯罪ぢやないか。だが、もう古いむかしのことだから、

くはしい話はわすれたよ。」

「しかし、おまいさんは、あの事件のほんとうの犯人を知つてゐるんだらう？」とイワンはつつこみました。するとマカールは笑つて、

「それやおまい、ほんとうの犯人も何も、げんざい、血のついたナイフが荷物の中から出て来た以上は、その人間が殺したんだらうぢやないか。かりに、ほかのやつが、人の荷物の中へ入れこんだものとしても、その本人がつかまらなげやアだめぢやないか。だが考へて見てもわかることだ、人が頭の下においてゐる荷物の中へ、どうしてほかのやつがナイフなんぞをおしこめられるかい。そんなことをすれば、眠つてゐる当人はすぐに目をさますぢやない

か。」

イワンはその言ひぐさを聞いて、ふゝん、あの商人を殺したのはこいつだなとかんづきました。

イワンはだまつて立ち上つて、あつちへいつてしまひました。

#### 四

その晩イワンは何ともたとへやうもないほど悲しい、いやな気もちにおさへられて、眠らうとしても寝つかれません。これまでわすれようとしてゐた、いろくゝのことが、一晚中入りかはり目

のまへに浮んで来ました。あのニズニイの市へ出かけるときに、門口へおくつて出た、そのときのおかみさんのすがたも目についてはなれません。おかみさんの目の色、笑ひ声、話し声までが、まざまざと目のまへに見えます。それから二人の子どもたちの顔もまざ〜と浮んで来ました。二人とも、あのときのまゝの小さな子で、一人はぐわいとうを着て立つてをり、一人は母親の胸の上にだかれてゐます。それからつゞいて、年もわかく、ゆかいにくらしてゐたじぶんのことも思ひかへされました。あのとき捕縛されるぢきまへに、あの村の宿屋の戸口に坐すわつてギターをひいてゐたすがたも目に見るやうです。それ以来、ずるぶんない間、世の中の苦勞といふものからはなれてゐるといふことをも、つく

／＼考へました。と、こんどは、あのときむちでうたれつゞけたあの監獄の光景、執行官、まはりに立つてゐた人々、くさり、すべての罪人たち、こゝへ来てから二十六年の間のすつかりの出来ごとを考へかへし、それからじぶんが年のわりよりもずつと老いぼけてしまつたことも考へました。

イワンは、いら／＼するほどかなしく苦しくて、いつそのこと、もう、ひと思ひに自殺してしまはうかとまで思ひつめました。

「あゝ、これもみんなあの悪いやつのおかげだ。」とイワンは心の中で言ひました。イワンはさう思ふと、もえ上るやうに腹立たしくなつて来ました。

「あいつを殺してやらうか。さかさに、こつちが殺されたつてか

まはない、どうかして、ふくしうしてやらなければ虫がをさまらない。」

イワンは、かう思ひつゞけた後、とう／＼夜があけるまで祈りつゞけにお祈りを上げました。しかしそれでも胸一ぱいのくやしみは取れませんでした。

昼の間は、イワンはわざとマカールのそばへは近づかず、マカールの方を見ることさへしませんでした。

こんなにして二週間といふものが過ぎました。イワンはその間、夜もちつとも眠れないし、のちには身のおき方もないくらゐにもだえなやみました。

ある或晩、イワンは牢屋らうやの中をぐる／＼歩いてゐました。囚人たち

は、みんな、壁ぎはにつけてある棚たなの上に一人づゝ寝るのですが、ふと見ると、さういふ或一つのたなの下から、土のかたまりがころころとところがり出ました。へんだなと思つて立ちどまつて見ると、れいのマカールが、そのたなの下からはひ出して来ました。イワンは、マカールだと知ると、見ないふりをしてとほりすぎようとししました。ところが、マカールは、いきなりイワンの手をつかんで、

「おい、おれは、この壁の下へ穴をほつてるんだよ。毎晩、長ながく靴つへーぱいづゝ土を入れて、昼間みんなが仕事に出たすきまに、外の往来へあけるんだ。おい、おぢいさん、だまつてゝくれ。穴さへあければおまいもにげられるんだから。おまいがしやべつて

しまへばおれはなぐり殺されてしまふんだ。だが、さうなれや、そのまへに先<sup>ま</sup>づ第一ばんにおまいをころしてやるから、そのつもりである。」とおどかしました。イワンは、怒りにふるへながら、マカールの顔を見ました。

「わたしはにげ出す気はないよ。また、おまいもおれを殺す必要はない。おまいはもう、とくのむかしにわしを殺してしまつたぢやないか。わしがその穴のことをしやべるか、しやべらないか、それは神さまのおさしづ一つだ。」

イワンはかう言つて、マカールの手をふりはなしてにげました。そのあくる日、囚人たちが仕事につれ出されるときに、つき番の兵隊たちは、だれかゞ、部屋の中から長靴をつき出して、土を

あけるところをひよいと見つけました。兵隊たちは、おや、と言ひ言ひはいつていつて、部屋中をすつかりしらべてまはりました。すると或寝<sup>ね</sup>だいな下のところに穴がほりかけてあるのが見つかりました。

だれがやつたのかと、典獄は、みんなを一々せめしらべましたが、だれもかれも私<sup>わたし</sup>ではないと言ひはりました。中にはマカールのしわざだと知つてゐるものもゐましたが、うつかり口に出せば、たちまちマカールがなぐり殺されるので、だまつてゐました。

典獄は困つたあげく、イワンに向つて聞きました。

「お前<sup>ま</sup>は正直な老人だ。神さまのまへで、おれに言つてくれ。一たいだれがあ<sup>ま</sup>の穴をほつたのか。」

マカールはそのときも何くはぬ顔をしてゐましたが、イワンが何と答へるかとその顔をじいつと見てゐました。イワンはくちびると両手をふるはせてゐるきりで、しばらくの間一ことも言葉を出すことが出来ませんでした。イワンは心の中で思ひました。

「わしを生き殺しにしたあいつだ。あいつをかばつてやる必要はさらにない。あいつも私<sup>わし</sup>を苦しめた代価をはらふのがあたりまへだ。……しかし私<sup>わし</sup>がしやべつてしまへばあいつはそくぎになぐり殺されてしまふにきまつてゐる。わしはあいつを商人殺しの悪ものだときめてゐるものゝ、まん一それが私<sup>わし</sup>のかんちがひであつたとしたら、よけいな告げ口をして、あいつを殺させるのも罪なわけである。ともかくしやべつたところで、けつきよく、わしに何

の得が来るわけもない。」

「おい、おぢいさん、どうだ。ほんとうのところを言へよ。あの穴をほつたのはだれだ。」

イワンはじろりとマカールの顔を見て答へました。

「それは私わたしには言へません。私がそれをしやべるといふことは神さまがお許しになりません。私が申し上げないのが悪ければ、私をどうにでもなすつて下さい。私の生命はあなたにさし出します。」

典獄はそんなばかな話があるものかと言つて、しつっこく問ひつめました。イワンは、どうしてもうちあけませんでした。それでとうとう犯人もわからずじまひになつてしまひました。

## 五

その晩イワンがやうやく眠りかけようとしていますと、だれだか、こつそりしので来て、イワンの寝だいなにそつと腰をかけました。やみの中をすかして見ますとマカールです。

「おい、何しに来た。この上わしに何を要求しようといふのだ。」  
とイワンは、むつとして言ひました。

「いけ。いかないと守衛をよぶぞ。」

かう言ひますと、マカールは、イワンのからだの上へこゞまる

やうにして、

「おい、どうぞゆるしてくれよ。」と小さな声で言ひました。

「おまいに何を許すのだ。」

「おれはほんとうに悪ものだ。あの商人を殺して、ナイフをおまいの袋の中へ入れこんだのは、このおれだよ。あのととき、おれはおまいをも殺さうとしたのだ。ところが外で物音がし出したので、ナイフをおまいの袋の中へつツこんで窓からにげ出したんだよ。」

イワンは頭をぐわんとなぐられでもしたやうに、ぼうとなつて言葉も出ませんでした。するとマカールはたなからすべり下りて、床板の下に両ひぎをつきながら、

「このとほりあやまる。どうぞ許してくれ。神さまのためだと思

つて、おれの罪を許してくれ。おれは、あの商人を殺したことを名乗つて出るつもりだよ。さうすればおまいも許されて故郷へかへれる。そのかはりどうか、これまでおまいを苦しめたことだけは許してくれ。おいイワン、ほんとうに許しておくれ。」

「ふゝん、口だけであやまるのはどうさもないことだ。だけれど、まあ考へて見ろ。わしはおまいのおかげで、今日まで二十六年の間苦しい目を見て来たんだよ。今になつてかへると言つてどこへかへるのだ。わしのようにぼはもう死んでしまった。小さいときに分れた子ども二人は、もうわしの顔もおぼえてはゐない。わしはかへらうつたつて、かへるところはないよ。」

イワンは、やつと気をおちつけてかう言ひました。マカールは、

そのまゝひぎをついたきり、いつまでも立ち上らうともしません。しまひには、とう／＼床板へ頭をすりつけて、

「まつたくすまないことをした。許してくれ。おれは牢屋らうやへはいつてびしく／＼ぶたれたときでもこれほど苦しくは思はなかつた。

かうしておまいのまへにすわつたこの心もちは、むちでぶたれるよりもまだつらいのだ。おれはつく／＼恥ぢ入つてゐる。おまいはおれをあはれんで、穴のことを言はないでくれた。イワンよ、おれはわるものだつた。どうぞ許してくれ。神さまのおためだと思つて許してくれ。」

マカールはかう言ひ／＼、とう／＼しやくり上げて泣き出ししました。イワンは、マカールの泣く声を聞くと、じぶんもひとりで

に、しく／＼と泣けて来ました。

「マカールよ、もう神さまも許して下さいよ。神さまのまへへ出れば、わしだつて、おまいより何十倍罪がひどいかもわからない。」

イワンはかう言ふと同時に、これまでながい間おもたかつた心が、急にはれ／＼して来たやうな気がしました。

その晩からイワンは、もう故郷へかへりたいといらく／＼する心もちもとれてしまひました。もう牢屋から出たいとも思ひません。たゞどうかして早く死にたいと思ふだけでした。

イワンは、マカールに、自首なぞをするにおよばないとかたくとめておいたのですが、マカールは聞かないで、とう／＼自白し

てしまひました。しかし、ロシアの裁判所から、イワンを放免するといふ指令が来たときには、イワンはもう死んで、この世の中にはゐませんでした。



# 青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第六巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1924（大正13）年11月

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2006年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ざんげ

鈴木三重吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>